本書の王系譜 http://www.hyogo-intercampus.ne.jp/gallery/yamatai/awebkeizu2.pdf

王朝の変遷

Ⅰ **那珂つ国**＝五帝期黄帝の一門（地の神）＋后土の国（黄泉国）→福岡平野に都す……前二十四世紀～

Ⅱ **那珂つ国**（なか）＋**天之国**（あめの）〔太伯・呉王夫差の子孫、天（太陽）や日の神を崇拝〕、天地（あめつち）……前五世紀中頃
→福岡平野の那珂川流域に都す

Ⅲ **厳之国王朝**（いつの）＝夏后帝小康庶子・越王句践の子孫、越オロチ族→福岡平野に都す……前四世紀後半
厳之国本家の宗像家→一門を各地に策封→吉野ヶ里（伊都国）、吉備（？）、出雲（佐太国）、摂津（小千族）、奈良盆地（三輪オロチ、三輪氏）、北陸（越オロチ、越智氏）　那珂つ国を中つ国と改名させ、出雲に追放

Ⅳ **倭国王朝**＝天（厳）之国＋日高国（韓一門）、高天　→唐津湾岸／福岡平野に都す……前二二〇年頃

Ⅴ **豊葦原中つ国王朝**＝豊国（漢一門）＋葦原家（厳之国一門）＋中つ国……前二世紀後半
→福岡平野の早良／春日に都す。厳之国本家の宗像家→宗家に祭り上げられ、玄海・宗像に閉居

Ⅵ **伊都国王朝**（いつ）＝吉野ヶ里のオロチ族＋大倭家……前一世紀中頃
→吉野ヶ里から福岡平野の春日や糸島平野怡土に乗り込み、怡土に都す。豊葦原中つ国を出雲に追放

Ⅶ **倭奴国王朝**（ヤマト）＝倭（ヤマト）（高天（たかま））＋豊葦原中つ国＋宗像家、天地（あめつち）→怡土に天宮（天上の都）す……一世紀前半
倭国大乱→皇太神が謀反し、邪馬台国（瑞穂の厳之国王朝）を樹立→倭奴国王朝分裂……一八〇年代中頃

副都オロチ勢・豊葦原瑞穂国　←　畿内

倭・日隈・大山祇神ら中つ国勢　←　日向・熊襲

豊葦原中つ国　←　出雲

邪馬台	厳之国王朝（唐古）	高天	天之国王朝（高千穂宮）	出雲
	天（厳）之国王朝（上之宮）	日隈	日前（ひのまえ）、妻国（つま）、投馬（つま）、狗奴	
	日本王朝（やまと）（珠城宮）	熊襲	和王朝（ヤマト）（高千穂宮）	

素戔嗚→豊葦原中つ国建て直しに失敗
大己貴（素戔嗚の児）→葦原中つ国再建
……二八五～二九〇年代末

神武（和王磐余彦）東征

Ⅷ **大和朝廷**　和国が大倭国と共立した大和家に豊葦原中つ国・厳之国等を併合……三〇一年
物部氏＝軍事筆頭の重臣に抜擢された火明饒速日の児・可美真手が、布都御魂剣を賜り、朝廷を守護

本書の王系譜

大乱後の倭奴国王朝（天地）→高天（倭）、豊葦原中つ国（奴国）、邪馬台国、大倭家に分裂

１８０年代前半／大乱　２２０年代前半　２５０年頃　３０１年に大和朝廷樹立

［倭奴国～和国］

伊奘諾 ┬ … 豊受皇太神（天照大神）

天之尾羽張（天神）┬ 向津姫／日神（天神）

〔宮都〕糸島市平原　高千穂町

西都市妻／川内　笠沙／　都城市／霧島市　宮崎市

向津姫／日神 ─ ○ ─ 火瓊瓊杵 … 火火出見 ─ ○ ─ 神武 … 崇神 … 応神 ─ 仁徳

［邪馬台国］　倭女王

〔宮都〕

（天神）

（倭王／天神）

（都督／倭王）

（都督）

唐古・鍵　纏向上之宮……纏向珠城宮／日代宮

天照大神 ─ 天鹿児山

垂仁（饒速日／天火明／火明饒速日）……

景行 ……

成務…仲哀……

神功

1ヒミコ ……2トヨ……3／4気長足姫…5倭（迹迹）姫

2トヨ＝豊鍬入姫

3倭迹迹日百襲姫

神功

［大日本国］

〔宮都〕

綏靖 ─ ○ ─ ○ ─ ○ ─ ○ ─ 孝霊 ─ 孝元 ─ 開化 ─ 崇神

大倭の葛木　黒田　堺原　春日　磯城瑞籬宮

……

◇伊弉諾夫妻の実子

伊弉諾の主な養子と人質、伊弉冉分身、伊弉冉の主な養女

伊弉諾 ┬ …（人質）少童（わたつみ）（海神（わたつみ））三神、筒男（つつのお）（住吉）三神、海神本家筋宗女、大山祇家宗女、闇龗ら

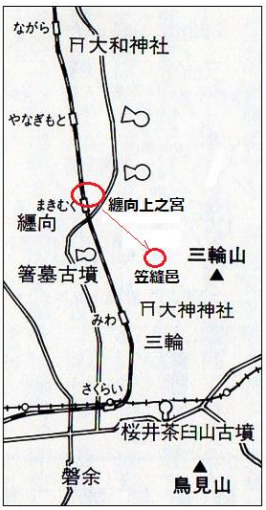
伊弉諾 ┬ …（主家嫡子の帝王教育）向津姫（天照大御神→ヒミコ）、天照皇太神（→天照大神）、素戔嗚ら

伊弉諾 ┬ …（実子）日子（ひるこ）（蛭児（ひるこ）→蛭子（えびす）、天事代主）、火軻遇突智（ほのかぐつち）（→火産霊（ほむすび））

伊弉冉 ┬ …（養女）大宜都比売（おおげつひめ）、丹生都比売（にうつひめ）の埴山姫（はにやま）（→大宜都比売襲名→大気津比売（おおげつひめ）→埴山姫）、罔象女（みずはのめ）

（伊弉冉分身）白山神（しらやまの）、菊理媛（くくり）／稚産霊（わくむすび）（豊受姫の母、日神分身稚日女（わかひるめ）→丹生都比売襲名）ら

本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕6



※水天神天照大神＝
マガダ国大王、
山王、牛頭天王、神皇産霊、
大穴持、佐太大神、大国主、
月読、月神、熊野櫛御気野、
御饌津神、豊受（天照）皇太神、
天御中主、天叢雲、倭大物主、
所造天下大穴持、大蛇、小蛇、
豊受大神、高皇産霊、熊野権現

水天神
天照大神 ═══ 豊葦原中つ国の姫
…… 豊受姫
天鹿児山 ═ 拷幡千千姫
彦火明→忍穂耳に養子入
1女王ヒミコ ……
日子坐王
日子坐王襲名
彦湯産隅
狭穂姫
狭穂彦
誉津別（火出見）…誉津別 ─ 仲哀 ─ 誉田別（気比大神）
2豊鍬入姫 ……
3倭迹迹日百襲姫
3／4神功 ……
5倭（迹迹）姫
神功
天道姫 ─ 天香語山 ─ 天村雲
天鹿児山襲名　天叢雲襲名
火明（二代垂仁）
饒速日（初代垂仁）…火明饒速日（三代垂仁）═
饒速日襲名
三炊屋姫 ─ 可美真手（物部氏の祖）
御炊屋姫襲名
味間見襲名
火照（海幸彦、火明）
火火出見（山幸彦）─ ○ ─ 磐余彦（神武）
神功 ─ 応神
火折→邪馬台国に天降り
火スセリ→海幸彦襲名
火瓊瓊杵 ……
木花開耶姫
御炊屋姫 ─ 味間見
大倭遷座
日神の天照大御神 ─ 忍穂耳
万幡豊秋津姫
火天神天鹿児山の長子→忍穂耳に養子入し、饒速日と名のる
筒木真若 ─ ○ ─ ○ ─ 気息足姫（神功）
彦湯産隅 ─ 日葉酢姫ら五姉妹→天火明・火明饒速日の大妃
○ ─ 三世倭宿禰 ─ 武振熊

184年（大乱勃発）　210～230年　250～270年　285年頃　300年頃

猿田彦
日子坐王

本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕7

１８４年（大乱勃発）　２１０～２３０年　２５０～２７０年　２８５～３００年過ぎ

【合成系図】

猿田彦（佐太彦）
日子坐王
（若くして他界）
天羽羽
火天神天鹿児山
水天神天照大神
妃瀬織津姫（天照大神荒魂）→廣田神社祭神
※→実家丹後海部家に戻り豊受大神を祭祀
分身待遇　火天神妃豊受姫→天孫と共に降臨※
→丹生都比売神社祭神
分身稚日女（豊受姫の母、稚産霊）→丹生都比売
日神 ― 忍穂耳 ― 火瓊瓊杵（天孫）
火照（海幸彦、火明）
火スセリ（海幸彦襲名）
火折…火火出見（山幸彦）
○―磐余彦（神武）
八幡
伊弉諾…
伊弉冉
大倭に遷座
天照大御神
天照大御神荒魂）→廣田神社・荒祭宮祭神
分身瀬織津姫（撞賢木厳之御魂天疎向津媛、
撞賢木厳之御魂天疎向津姫）…2トヨ……3／4神功……5倭（迹迹）姫
倭女王　1ヒミコ（撞賢木厳之御魂天疎向津媛、
大日霎貴
日本武
武内宿禰
日子坐王
彦湯産隅
日葉酢姫ら五姉妹
遠津年魚眼眼妙媛？
彦火明、二代垂仁
天火明（天孫）
狭穂姫
三炊屋姫（御炊屋姫襲名）
火明饒速日（三代垂仁）
火明、日本大物主大神
天道姫
活玉依比売
オオタタネコ
神の子
饒速日（天孫、初代垂仁）
御炊屋姫
味間見（物部氏遠祖）
日本大物主大神
稲日大郎姫
大足彦（大倭家移籍、彦太忍信襲名、景行）
倭姫（大倭家移籍、五代女王）
豊城入彦（豊国移籍）
豊鍬入姫（豊国移籍、（二代女王トヨ）
誉津別（火火出見）…誉津別…仲哀
天香山（鹿児山襲名、尾張氏遠祖）
可美真手（味間見襲名→物部氏の祖）
天香語山（尾張氏の祖）
天香山襲名、高倉下
天村雲
天叢雲襲名
影姫
彦狭嶋（大倭家移籍）
気比大神（誉田別）
神功（気長足姫、四代女王）
大和朝廷の開祖　気比大神と名を交換
始馭天下天皇　誉田別と語る→応神
2豊鍬入姫　3倭迹迹日百襲姫

※水天神天照大神＝マガダ国大王、山王、牛頭天王、神皇産霊、大穴持、佐太大神、大国主、月読命、熊野櫛御気野、御饌津神、豊受（天照）皇太神、天御中主、大蛇、天叢雲、倭大物主、所造天下大穴持、豊受大神、熊野権現

「けだし神の子か」
「吾は、現人神の子なり」

邪馬台国〔瑞穂の厳之国王朝・天(厳)王朝・日本朝〕、南九州天之国・高天系〔日隈・日前・和〕の対立

三輪氏、豊葦原水穂国らが連合し、豊受皇太神を天照大神に擁立

邪馬台(やまと)国

オロチ厳之国王朝の再現

倭(奴)国王朝再現

倭(奴)国王朝再現

倭(奴)国王朝再興

大倭

瑞穂の厳之国王朝……→

天(厳)之国(倭国)王朝→**日本(やまと)王朝**……→**物部氏**

＋大倭国

＋豊国＋葦原中つ国

＋大日本国(大倭国)

大和朝廷

和と大倭国が樹立

301年**神武**即位

橿原宮

180年代中頃

210年代前半

220年代前半

250年頃

水天神**天照大神**/**饒速日**(初代垂仁)/**天火明**(二代垂仁)/**火明饒速日**(三代垂仁)

〔都〕唐古

纏向上之宮　火火出見

纏向珠城宮

景行・仲哀の熊襲征伐

倭女王

ヒミコ(日神)……2豊鍬入姫…3/4神功5倭(迹迹)姫（3倭迹迹日百襲姫）

乱大国倭

倭奴(ヤマト)国王朝〔倭国(高天)＋豊葦原中つ国＋大倭国＋日隈〕

〔天宮〕糸島平野怡土

天孫彦火明

彦火明

伊奘諾の南遷

天孫饒速日・**日神**の大倭遷座

海幸彦の大倭降臨

神武(磐余彦)東征

天之国・高天　→**日隈**　→**日前**(投馬国、狗奴国)　→**和国**……

素戔嗚**豊葦原中つ国**建直し失敗。大己貴**葦原中つ国**再建→天神の御子に国譲り→大倭に移る

火火出見(山幸彦)の日向天降り

山幸彦・海幸彦の争い

日向

天之国・高天……

天孫の吾田降臨

南九州

日隈(日前、ひのくま)→**日前**(ひのまえ)→**和**(ヤマト)**王朝**

180年代後半

日神

〔都〕天宮高千穂宮

220年代前半

皇孫火瓊瓊杵

笠沙宮(加世田市)/西都(西都市)/高城宮・川内宮(川内市)

250年代

火火出見

高千穂宮(都城市)/高千穂宮(霧島市)

280年代

磐余彦

高千穂宮(宮崎市)/岡田宮(高島宮

倭の女王ヒミコの一生

倭奴国王朝六代女系天神の宗女として誕生→向津姫、若日女→天照大御神、日神→倭の女王ヒミコ→天照大御神

1 **倭奴国**（倭＋豊葦原中つ国）**王朝六代女系天神、天之尾羽張神の時代**（一六〇年前後～一八〇年代前半）

一六五年頃、六代女系天神の宗女として怡土の天宮（天上の都）で誕生→向津姫、天之国の若日女

※豊受（天照）皇太神（熊野櫛御気野、出雲では山王、牛頭天王、大穴持、大国主）→〔向津姫に婿入り〕

婿入前の彼は、伊雑宮の巫女玉柱屋姫（瀬織津姫？）、尾張海部家の姫らを妃に娶り、天鹿児山をこしらえた

一八〇年代中頃、三輪氏らと組んで謀反し、邪馬台国〔瑞穂の厳之国王朝→ヒミコの天（厳）之国王朝（倭）

→火明饒速日の日本朝に発展〕を興して天叢雲、天照大神、水天神、倭大物主、大蛇と語る→大乱に発展

※大乱時、天照大神妃で分身の瀬織津姫（天照大神荒魂）→広田国（西宮市）に布陣して合戦を采配

2 **王朝瓦解後、高千穂郷に逃れた**高天（日高＋天之国、倭と語れず）**期**（一八〇年代後半～二二〇年代前半）

天之国の天宮、高千穂宮では、**天照大御神、日神**（七代女系天神）〔齢二十代前半で、日神に即位〕

※稚産霊→日神分身の稚日女→丹生都比売、丹生都比売神社（和歌山県）祭神→伊射波神社（鳥羽市）祭神

3 天照大神、高皇産霊と称して高千穂宮に赴き、葦原中つ国平定→**日神**に大政奉還→高天との統一王朝、誓約

4 **天（厳）之国**（倭）**王朝期**（二二〇年代前半～二四〇年代後半）〔齢五十代後半で大倭纏向宮に遷座〕

纏向入りして倭の女王**ヒミコ**（日継の御子、日の巫女）に即位。亦の名は撞賢木厳之御魂天疎向津姫

※天照大神分身の瀬織津姫→ヒミコ分身（撞賢木厳之御魂天疎向津媛、天照大御神荒魂）に転身

5 **女王退位後**、笠縫邑（檜原神社の鎮座地）や伊勢五十鈴宮では、天照大御神

※笠縫邑では天叢雲剣で以て天照大神を祭祀。五十鈴宮では、天叢雲剣で天照大神、檜御柱で高皇産霊を祭祀

6 **二四〇年代末、五十鈴宮で逝去**〔享年八十余歳〕→箸墓円形部（円壇→五段重ね円墳）に埋葬された

7 三〇四年二月二三日、鳥見山中の祭場（桜井茶臼山古墳）で、夫の御魂と共に皇祖天神に配された

※内宮祭神は天照大御神。荒祭宮祭神は天照坐皇大御神荒御魂とも天照大御神荒御魂とも。一説では瀬織津姫。

内宮別宮伊雑宮（天照大神の遥宮）祭神は、天照大御神御魂、相殿祭神は玉柱屋姫命。廣田神社（西宮市）祭神は天照大御神荒御魂（撞賢木厳之御魂天疎向津媛、一説では瀬織津姫）。生田神社祭神は、稚日女尊

『邪馬台三国志』ダイジェスト版　目次

◇倭国／倭奴国の国のかたち

倭国の生い立ち　●那珂つ国
●天之国とオロチ厳之国王朝／太伯ら子孫と越オロチ族　●倭国王朝の建国

倭奴国王朝　●豊葦原中つ国と伊都国の王朝　●倭奴国王朝／安曇族の渡来

倭国大乱と邪馬台国　◇南伝仏教の東アジア流入　●神国と常世づくりと伊奘諾
●豊受皇太神　●倭国大乱　●伊奘諾の南遷　●二人の天照大（御）神

東西の王朝　●日神の出現　●天石窟　●オロチ退治　●天日槍襲来
●天照大神、高千穂宮へ／天孫饒速日の天降り
●葦原中つ国平定　●天孫瓊瓊杵の出現　●皇孫火瓊瓊杵の天降りと日隈（日前）
●日神の畿内遷座　●天照大神（高皇産霊）の湖西高島宮と天成神道

倭の女王　●倭の女王ヒミコと纏向上之宮／皇孫火瓊瓊杵の日前国西都と天孫天火明の日高見国東都
●皇子の交換　●女王の朝貢　●海幸彦と山幸彦　●内部抗争
●火明饒速日（海幸彦）の天降り　●女王の伊勢遷座

日本王朝と日前の対立　●女王トヨ　●一都七道制　●天神火明饒速日
●太子　磐余彦　●景行の熊襲征伐　●和王　磐余彦　●仲哀の熊襲征伐

天下は一つ、家は一つ（神武東征）　●東征出発　●筑紫国の奪還
●新羅遠征　●吉備征伐／高島宮／出雲征伐　●生駒の敗北
●熊野上陸／熊野権現の神倉山垂迹
●日前宮の創祀／日本に迫る　●日本の降伏

大和朝廷の成立　●橿原宮　●日本武尊の北伐　●大和朝廷のはじまり１
●大和朝廷のはじまり２　●皇祖天神に奉る郊祭

◇倭国／倭奴国の国のかたち

倭国王朝＝天（厳）之国＋日高国（戦国七雄・韓の一門）＝高天　　前二二〇年頃成立

倭国王朝　高天

天（厳）

天　天（日）日の神……北方系銅鏡

天（水）水の神……鉄剣・鉄刀

厳　厳（火）火の神……弓矢・鏃

厳（水）水の神……銅剣

水穂国

日高

日隈（熊野家）……日隈神宝〔日鏡・玉三つ・熊の神籬など＋瓊矛〕

〔国の祭器〕

太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀

〔上古の祭器〕那珂つ国：死返玉など玉つ宝十種、厳之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他

『晋書』や『魏略』逸文、「（倭人は）太伯の末裔と自ら言う」

倭奴国王朝＝倭＋豊葦原中つ国＝天地　　倭国＝天（厳）之国＋日高＝高天　一世紀前半成立

倭奴国王朝　天地

倭　高天

天（厳）

天　天（日）：北方系銅鏡（方格規矩鏡）

天（水）：鉄剣・鉄刀（布都斯魂の十握剣）

厳　厳（火）：弓矢・鏃

厳（水）：銅剣

水穂国

日高

日隈（熊野家）……瓊矛・日鏡など日隈（熊野家）神宝

初代天神の女帝＝天常立

初代倭王＝女帝の入り婿

豊葦原中つ国王・国常立

豊葦原中つ国（豊国＝火神、葦原家＝厳分家、中つ国＝地の神）：弓矢・玉類

〔国の祭器〕

太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀

〔上古の祭器〕那珂つ国：死返玉など玉つ宝十種、厳之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他

奴国＝中つ国、后土国　　闇見国＝月夜見国、黄泉国、鬼国

倭国の生い立ち

●那珂つ国

縄文中期中頃（四五〇〇年前）になると、寒冷化が始まって関東や中部の遺跡は激減した。逆に、近畿を中心とする西日本のそれは急増しつつあった。このことは気温の降下期とも合致しているが、黄帝一門が四三〇〇年前に日本列島に渡ってくることや、水田稲作が中国大陸の四方八方に広がる時期とも無関係ではあるまい。そこで、こう考えたがどう思われるだろうか。

「黄帝のやり方を真似た彼らは、仁徳・慈愛の政を謳って福岡平野に神仙の国（神国）、那珂つ国を立ち上げると、東西南北四方に忠臣の四カ国を配置して国邑を守ってきた。

その四カ国は、土の神を称えて后土末裔と自負する北方の黄泉国（鬼国、闇見国、宗像・玄海から博多湾・玄界島にかけて展開）、同じく地の神を祀って黄帝一門と称する国東の杵築国、火神を奉って炎帝（神農氏）子孫と語る南方の火の国・その配下の熊族（熊襲、熊本平野以南に展開）、水の神を信奉する西方の海神大神（筑紫平野以西の海岸地帯や島嶼を守備）だった」

この千余年後（前一一〇〇年代中頃）、殷の天下が揺らぎ始めた。この時期、太伯が周太王・古公亶父の長男として、ついで周王朝の皇祖となる武王が周太王末子季歴の次男として誕生した。

こうした宗教・農法・生活習慣を背負った那珂つ国の軍勢が、山陽道・山陰道を突き進んで出雲・安芸・吉備・畿内に進出して分国を立ち上げ、先住民らに神国づくりや焼畑農法を教えてきた。後期末から縄文晩期にかけては、奈良盆地に出先機関を設けたり、東勢と交易するなどしてきた。これも広田遺跡・雲井遺跡（神戸市）・橿原遺跡・滋賀里遺跡などから、はっきり見て取れる。

晩期前半になると、那珂つ国は春秋期に横行した損得や我欲で以て人や物事に対処する気風に染まったのか、東の領土拡大に突っ走ったが、北や東から繰り出してきた縄文勢に押し戻された。

●天之国とオロチ厳之国王朝／太伯ら子孫と越オロチ族

前五世紀前半、越に滅ぼされた呉の一門は、生きる当てもない難民となって各地を流浪する者、東海上に乗り出す者、斉に隠れ潜む者、朝鮮や遼寧地方に脱出を図る者らが跡を絶たなかった。

そうした中で、ひときわ明るい噂が彼らに舞い込んできた。

「東の海上に戦争も略奪もない蓬莱郷があると聞く。現に、そこから不老長寿の仙薬を携えながらやって来た者もいるという」

この噂に夢をつないだのか、呉本家筋の太伯ら子孫は筏船や帆船を操りながら東海上に漕ぎ出すと、黒潮に乗って琉球諸島沿いに北上し、島原半島や有明海沿岸にたどり着くらしい。

彼らはさらに東行して唐津湾岸や糸島平野に到ると、菜畑や曲り田など湿地帯に分け入って水田稲作に励む一方、祖霊が天に昇って太陽（日）になったと信じて先祖祭祀に入れ込んだ。いつの頃か天之国（あめの）と銘打って、日鏡（ひのかがみ）・奥（瀛（おき）、興（おき））つ鏡・辺（へ）つ鏡で祖霊を日の神として奉ってきた。

そうこうする中で、熊本平野の熊族が擦り寄ってきた。双方は足並みをそろえて福岡平野の那珂つ国にじわじわ近づいていった。

那珂つ国がこのよそ者にどう反応したかは知る由もないが、中国神話や考古学から推察する限りでは、那珂つ国は彼らに対して、

「古から伝わる天地開闢の神話にあるごとく、天之国と連携した天地なる国体の下で、東の縄文勢にあたるのが正道だ」という国論に落ち着いた模様だ。この結論は、四三〇〇年前に渡来した彼らの先祖が海神族を配下に取り込み、領土拡大に突っ走った先例に倣ったものらしい。

その後の天之国は、那珂つ国と好を深めると、呉国流国づくりや集落を濠で囲って身を守る術を教える一方、那珂つ国の集落に分け入って水田稲作を手ほどきするまでになった。

こうした努力を何代にもわたって積み重ねた結果、那珂つ国庇護下で天地と称して手を携え、六

甲山南麓の生田川東岸（雲井遺跡）、奈良盆地（橿原遺跡）、琵琶湖南（滋賀里遺跡）に進出することができた。そうした中で、那珂つ国と天之国は、天地連合軍と銘打って大がかりな東征軍を北陸や東海に送り込んだが、北と東から繰り出してきた縄文勢に打ちのめされた。

前三三四年ころ、今度は越が楚に滅ぼされた。越王は禹や夏后帝小康末裔のオロチ族とされる。この時期に、長江、淮河流域、斉に広がっていた越人らは、楚の迫害を恐れるあまり、北の遼東や朝鮮に逃げ込むらしい。越が直接支配した地域でも、名だたる越オロチ一門が江南の海岸地帯に割拠しつつ再起を窺っていたが、いつの間にか楚の傘下に組み込まれていた。

その状況下で、本家筋に近い越オロチ一門が郎党ともども帆船に分乗して、風の便りに聞き知った蓬莱三島に楽土を切り開くべく、東海上に漕ぎ出して行った。

この一団は琉球諸島沿いに北上して薩摩半島坊津辺りに襲来するや、瞬く間に半島を占領して堅固な足がかりを築いた。ついで遠征軍を編成して、不知火海・八代海・島原湾沿いに北上した。その狙いが肥沃な筑紫平野や、那珂つ国の都する福岡平野の攻略にあったのは言うまでもない。

この侵略者に対して、那珂つ国や天之国がどう立ち回ったかは伝承の一つすらないが、地名・考古学・後世の祭器の有り様から推測すると、以下のところに行き着いた模様だ。

「那珂つ国と天之国の連合軍はあっさり負けてしまい、那珂つ国は闇見国や杵築国ともども辺境の出雲に追いやられ、国の名も中つ国と改名させられた。一方の天之国は、越オロチ旗下に組み込まれた上に、越流米づくりを強いられた」

その際、那珂つ国や天之国の配下らは、洞ヶ峠を決め込んだまま動こうともしなかった。

天之国にすり寄ってきた火の国の熊襲は、またも寝返って越オロチ傘下に潜り込むや、那珂つ国・天之国に襲いかかった。

その後の越オロチは、鰐族・山祇族・三嶋族らを従える海神大神と手を組み、瑞宝十種（みづたからとくさ）を奉る